

交流を考える

延 鏡淑 (ヨン・ジンスク)¹

現在、国際交流という名の下で交流を行っている団体・組織は相当ある。しかし、長期的な計画の下でこうした交流を行っている団体・組織はさして多くはないのではなかろうか。信州大学にはいろいろな国から大勢の留学生が来ており、学術協定を結んでいる外国の大学へ留学することも出来る。この点に於いては国際交流に関する環境はある程度整っていると言える。信州大学の学生は、「授業によっては、留学生と一緒に授業を受ける」、「交換留学制度がある」、「国際交流関連の行事が多数行われている」といった素晴らしい環境の中にいる。国際交流に参加しようとする意志さえあれば、学生にはその機会が与えられている。

今年信州大学で行われた国際交流関連行事のなかで、「日韓言語文化研修プログラム2005」は、国際交流を实践するうえで一つの手本を示している。

私は、この研修プログラムに3日間参加した。「日韓食文化交流会」で韓国の食文化の紹介を担当し、何人かの学生たちと共同で韓国料理を作り、交流会の参加者に試食してもらった。短時間に何十人分もの料理を作らなければならないという重圧感もさることながら、皆さんに食べてもらう料理の出来が大いに不安だったが、日韓の学生が一丸となって働き、お陰で無事に完成することができた。出来上がった料理を食しながらの交流も、もちろん意義のある一時だったけれども、日韓の学生同士が力を合わせて、料理を作るというそうした自然体の交流もまた、見逃せない意義あるものであった。何かを作るためにともに考え、又、作りながら喜びを感じる若者の姿をそこに見出すことができた。

この他に注目すべき点は、日本語教育学専攻の学生のみならず、全学部から交流を希望する何人もの学生が参加して、カトリック大学の学生と1泊2日の和気藹々とした時を過ごしたことである。研修には日韓の学生以外に中国からの留学生たちも参加し、国境を越えた若者の集いのような雰囲気があった。この交流は国籍の違いをあまり感じさせない、胸襟を開いた真の交流の場となったと思っている。

¹ 信州大学高等教育システムセンター外国人教師。

この研修では、穂高の一般家庭に韓国のカトリック大学生たちがホームステイをした。普通の日本家庭で日本人と日常生活をともにすることは、めったにないよい機会だったはずである。

ホームステイは、日本の普段の生活の一端を見ることができ、いろいろなことを学べる機会でもある。ホームステイを通じて、日本の文化や風習に対する理解を深めることが出来る。ホームステイの何よりも大きな効果と言えるのは、日本人の温かい心に触れることで、日本に対する偏見や距離感などが消えてゆくことではないだろうか。

実際ホームステイを終えて帰ってきた学生の顔には、生き生きとした感動に溢れる表情が伺えた。私もその姿を見て大いに感動した。響きのいい言葉だけの交流ではなく、一緒に行動をした体験を伴う交流にはお互いの信頼を深めるものがきつとあったに違いない。日本が好きになる、韓国が好きになる理由は、素晴らしい文化を持っている国だからなど様々な理由があると思われるが、自分の大切な友達が住んでいる国だからと言うことは大きな理由の1つになるに違いないだろう。

今回の「日韓言語文化研修プログラム2005」は、両国の学生にとって非常に実のある貴重な時間になったと確信している。相手の国を理解するために相手の国に直接出向いて交流をすることの必要性も再確認されたと私は思っている。

微力の故に今回の研修プログラムにさして役立つようなことはできなかったけれども、交流の輪を拡げて行くために今後も出来る限りお手伝いをしていきたいと思っている。

最後に、このような素晴らしい研修プログラムに参加する機会を与えてくださった信州大学日本語教育学研究室の皆さんと関係者の方々にこの場を借りて感謝申し上げます。